



「はあっ!。」

アイシヤの蹴りが炸裂し  
襲い掛かってきたモノの頭部が粉碎される。

アイシヤは単独任務で訪れた場所で  
今までにない状況に遭遇していた。

今回の任務はマーゴのような化け物と共に  
目撃されたのが

ゾンビという話だった。

アイシヤも映画が好きなので  
ゾンビは見知ったものだが、  
当然実物は見た事が無い。

だがマーゴが関わっているとすれば  
それは操られている人間、  
という可能性が真に浮かんた。

かくして人払いの住んだ病院に侵入したアイシヤ、  
そこで目撃したのは、

動く死者、ゾンビだった。

ゾンビは案の定  
侵入者であるアイシヤに  
襲い掛かってきた。

しかしその動きは映画等で見たと通り、  
非常に愚鈍で、  
そのお陰かアイシヤは十分に  
ゾンビを観察することが出来た。

そしてこれが間違いなく死体である事と、  
体の各所に  
赤い極細の光る糸の様なものが見え  
それが死者を操作しており、  
活動を止めるとには  
頭部と胴体を粉碎する必要がある  
という事が分かった。

「あーらら、人間相手にひどいなあ、  
マーゴハンターは人を守るんじゃないの?。」

「元 でしょ?。」

部屋にいた  
数体のゾンビを片付けたアイシヤを  
おどけた調子で煽るマーゴ。

ゾンビのいる方向に向かって進んだ先、  
解剖室に入ったアイシヤの  
前に現れた。

アイシヤが入ってくると  
マーゴはゾンビをけしかけ、  
それが壊されると、  
それは死体を操る実験をしていたと  
自慢気にアイシヤに語った。

「死んだ人の尊厳まで踏みこむなんて…。」

「お前みたいなのは、交渉の余地無しだ、ここで始末する。」

死者すら弄ぶこのマーゴを危険と判断したアイシヤは  
いつもの交渉をせず  
確実に仕留める事を決意する。

「お前つてのあんまり好きじゃないな、僕はキバリス、よろしくね。」

後、もう君は負けてるから。」



（ハツタリで隙を作る気？、ならアクイラで一気に決めるか。）



アイシヤの腰のアニマウエポソから赤いエネルギーが噴出し、  
その形を形成し始める、  
そして前に出ようとしたその時、

そのままの体制から動けないことに気付いた。



何……?!?)



「君が死体と遊んでる間にね、僕の糸で縛らせてもらったよ。」

よく見るとアイシヤの身体中に赤く光る線のようなものが見える、  
その糸は拘束されているというより張り付いているような感覚を  
覚えたが、何故かアイシヤは体を動かすことが出来ず、  
発動した赤い羽根も霧散してしまふ。



「ム…。」

「しかしなんであんなに長く遊んでたの？  
君程の実力だったらあんなものすぐに壊せたでしょ？」

「やっぱり元人間だから？、やっさしーね、アハハハハッ。」

「じゃあ楽しもつか♪。」







「う……くうっ……！」

「ふふ、いいねその必死にもがこうとする姿、  
きつとそうやって何度もピンチを脱出してきたって  
分かるよ。」

でももがくだけ無駄ムダ、僕の糸はレベルが違うんだよ」



キバリスの糸に捕らわれたアイシヤは気をつけの姿勢で固定される、

その最中に糸がアニマウエポシに入り込み  
強制解除させられ、更にサブアニマも取り外されてしまう。



くそ……この糸は何なの……もう体に全然力が入らない……

アイシヤも捕らわれて直ぐに糸からの脱出を試みた、  
だが糸が触れている部分から力が急速抜ける感覚を覚える。

最初は少し位抵抗も出来そうだったが、今はもう体の全てが  
脱力しきつてもう首から下は指一本すら自分の意思で動かすことが出来ない、  
しかもこの状態になるまでわずか数分。

それだけでキバリスの能力が並みでは無い事を証明していた。

キキッ

キキッ

「僕の系には強力な脱力の効果があるからね、レギオンクラウンでも評判なんだ。」

「!?、あなた、レギオンクラウンの協力者?。」

レギオンクラウンとは構成員の殆どがマーゴなのが特徴の裏社会の組織の二つでマーゴの能力が付与された強力な武器、薬品等や人間の売買もする組織である。

「違うよ、幹部だよ、か。ん。ぶ、僕はえらくて強いんだ、だからその系に絡めとられた君は僕の操り人形なんだよ。」

でも人形にするんじゃ芸が無いし、折角のマーゴハンターだし今日は違う事をしようと思うんだ。」

キバリスの針金のような指が変形すると、そこから紫に輝く糸が生み出される。ゆらゆらと揺れる糸はキバリスの指の動きに合わせて踊り、そして一直線に彼女に殺到していく。

キキッ

「気づいたかい？」

今この糸で君の子宮を括っているんだ、  
内臓を縛るって結構デリケートでね、  
物理的な力でやると苦痛と不快感しか無くて泣き叫んで  
そのうち死んじゃうんだよね、だからここの特殊な糸を使うんだ。」

（う…まずい…な。）

糸が子宮に絡みつくと度々  
下腹部から広がる甘い波動に嫌な予感が膨らむ。

アイシヤの子宮は過去にあるマーゴに改造された後遺症で、  
術や薬物の効果を2倍にして全身に影響を及ぼしてしまっ  
しつかもその効果はアイシヤがマーゴハンターとして  
持つ解毒効果などをすり抜けてしまうのだ。



暫くして絶頂の山から降りてこられたアイシヤだったが、子宮を起点とする未知の快感に翻弄され、その表情は蕩げもう脱出の思案を巡らせる所ではなくなっていた。

「戻ってきた？、で？感想は？、ねえ、ねえ？」

キパリスは子宮と直接繋がった糸をクイツ、クイツと引っ張り先程保留していた質問をアイシヤに投げかける。

「んふあ♡！、や、めえ♡、こんら…、んはああ♡♡♡！！」

「僕が聞きたいのは気持ちいいかどうかだよ。」

応えに満足いかなかったのか、回を尖らせ、制裁とばかりにアイシヤの子宮を縛る糸をきつくする。

その刺激に先程までのように回をつぐみ、耐えようとしても出来ずアイシヤの回から甘い声が溢れる。

「でねそんな中から僕の感性に反応したものがあつたんだよ、  
で、今はそれを実践してるんだ。」

「うー、うー。」

キパリスの背後にいた女性ののような形をした怪物が呻く。

「話の途中でうるさいな、  
これが出来たら君らの出番だから待ってるよ。」

「あ、ごめんね、  
でね、人口で臓器を作る時に検討する為にそれを使うんだけど……。」

「3Dプリンターって知ってるかい？」







「んい…く…んう…。」

「ん？、随分頑張るね、  
もう気持ちよくてしようがないんでしょう？。」





キバリスの糸に捕らわれたアイシヤ。  
その糸の効果により体にはもう全く力を入れる事が出来なくなり、  
糸に操られるままに腕を頭の後ろに組まされ屈辱的な体制で固定されていた

「糸で君の身体を調べたもん、もう体中発情しまくってるじゃん、  
しかも腋がめちやくちや敏感なんですよ？、  
だからそいつらにずっと責めさせてるんだからさ。」

「そいつらの具合はどう？、この前友達に作ってもらった新型だけど、人間の女の脳みそを使ってるんだよ。」

「んふっ…んふっ…い…」

「マドレーデバイスって知ってる？、あれを作ってるのが僕の友達でね、新型とかたまに貰えたりするんだ。そのエモニーはこういうエロい事をさせるのが得意な奴なんだ。」



「そいつら生きてる頃は病的なまでに整形しまくってて、  
兎に角綺麗になりたいって欲望が凄かったんだって。」

だからそれを利用してるんだけど、  
こいつら僕の命令なのに君の腋を舐めまわし続けられ  
綺麗になれると思ってるんだよ。  
あつわれだよね〜アツハハハ。」

「…この…人を玩具みたいに…絶対に、殺す…。」

「こっわ〜い♪、  
でもその舌、気持ちいいでしょ？、  
スポンジみたいになんか柔らかくて、適度にザラザラで  
染み出してるのは浸透性と  
揮発性の高い媚薬、乳首もピンピンじゃない。  
さらさら〜に、こっすれば…。」





「はあ、あ♡、くあ♡♡♡…はあ、はあ…♡♡♡」

「もうかんったんにイツちやうんだよね。」

ちゅ♡

ちゅ♡

ちゅ♡ちゅ♡

ん♡ん♡

ん♡ん♡



エモニーの頭部が発光するとその光の波動がアイシヤの腋から浸透し、  
絶頂を迎えてしまう。

このエモニーは頭部から強力な快楽波動を発生させる事が出来る、  
その快感は体に蓄積し最初は問題なく耐えられるのだが、  
繰り返し弱点を刺激されながら波動を注がれてしまえば、  
今のアイシヤの様に注がれるだけで簡単に絶頂を迎える体になってしまふのだ



「はあ……んう……このおおあああっ♡♡♡!!!!」

快感波動を注ぐ頭部の発光はランダムで、それにより耐えづらいう状態を作り出していたが、今アイシヤを襲った刺激は腋からでは無く下腹部を襲ったものだった。

「ぺちや、ぺろ、ウフフ。」

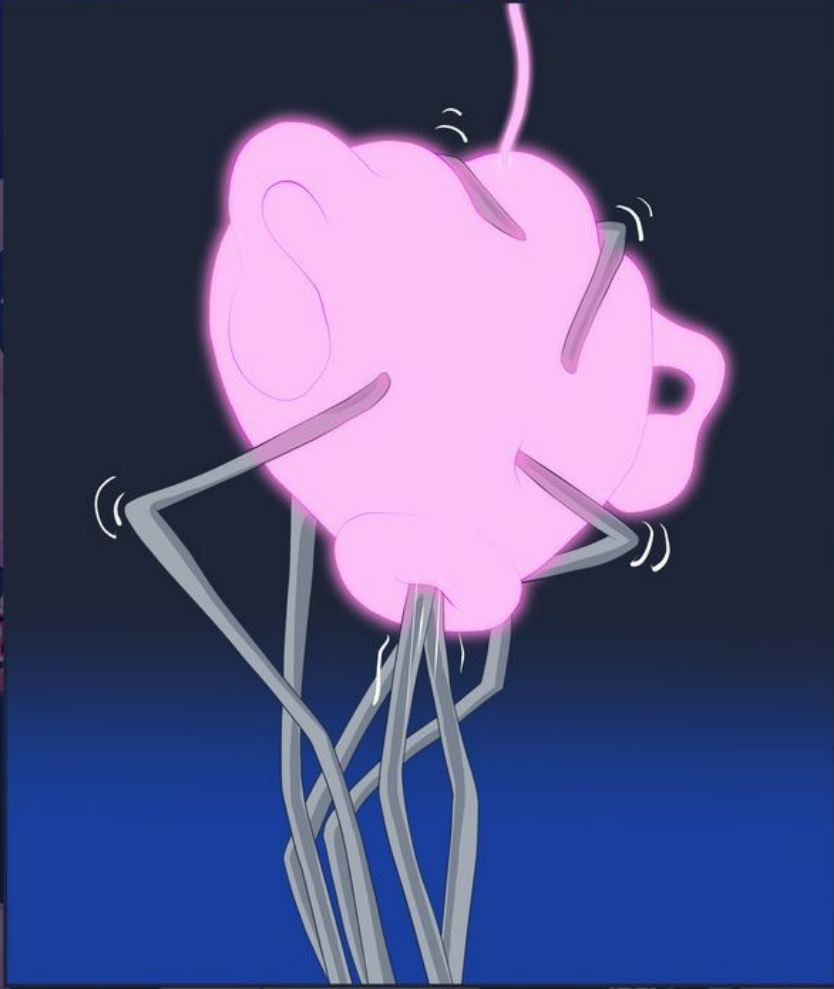


キバリスがその手にもったものを舐めると、  
アイシヤから甘さを合んだ叫び声が溢れる。

「文字通り君の子宮は僕の手の上に……なんてね、  
こんな経験、したことないでしょ？」



キバリスは疑似子宮をグニグニと揉み込みながら子宮口に細い指を突き込み、中をかき混ぜるように弄ぶ。



グニグニ!!



「ふぁっ♡！そん…な♡だ、だ、めえ…んあぁあぁあ♡♡♡♡♡！」

セツ♡

ちゅ♡ちゅ♡

わぁ♡

♡♡  
♡♡♡  
♡♡♡

疑似子宮は  
淫紋から伸びる糸でアイシヤの子宮と感覚が繋がっており、  
その刺激は直接アイシヤの体に襲い掛かかかる。

しかも淫気で作られた疑似子宮の刺激は  
通常の何十倍の快感になる。

そのような刺激をアイシヤの子宮は  
過去の改造で受けた後遺症により  
更に倍の効果に増幅し彼女の身体を蕩けさせていく。



「んひああっ♡...あっ♡あっ♡

ゾクゾク♡

ちゅちゅ♡

わんわん♡

んん♡



エモニーの頭部が発光し、快樂波動が注がれる  
それは疑似子宮の刺激と合わさる事で  
アイシヤに抗いようなのない絶頂を与える。

「……ふん、これだからマーゴハンターって奴は……  
じゃあメンバー追加しようか！」

この短時間でもうすぐ3桁に迫る絶頂回数を迎えたアイシヤだが、  
まだこの状況を打開する事を諦めていなかった。

しかしそれを見透かしたように意味深な笑みを浮かべたキバリス  
の背後から別のエモニーが姿を現した。

ゾクゾク

ちゅちゅ





あ...うあ...

あ...あ...!!

ゴッポ  
ゴッポ

くちゅ  
くちゅ  
ぐちゅ  
ぐちゅ

くちゅ  
くちゅ  
ぐちゅ  
ぐちゅ

グルルル...

ゴッポ  
ゴッポ  
ゴッポ

ふ...あ...

う...あ...

グネリ

ゴッポ  
ゴッポ

ゴッポ  
ゴッポ

グネリ  
グネリ

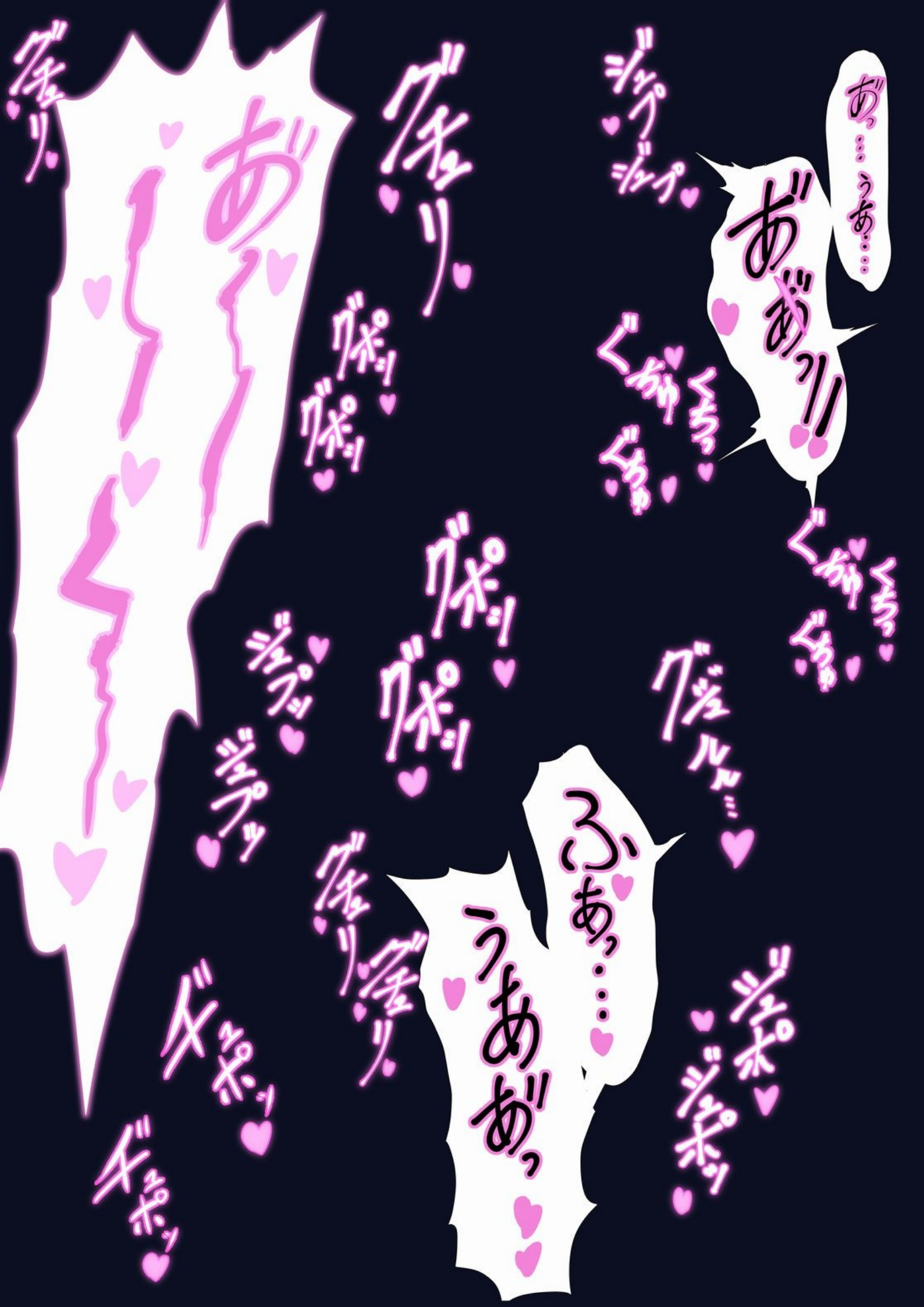
ゴッポ  
ゴッポ

ゴッポ  
ゴッポ

ゴッポ  
ゴッポ

あ

グネリ



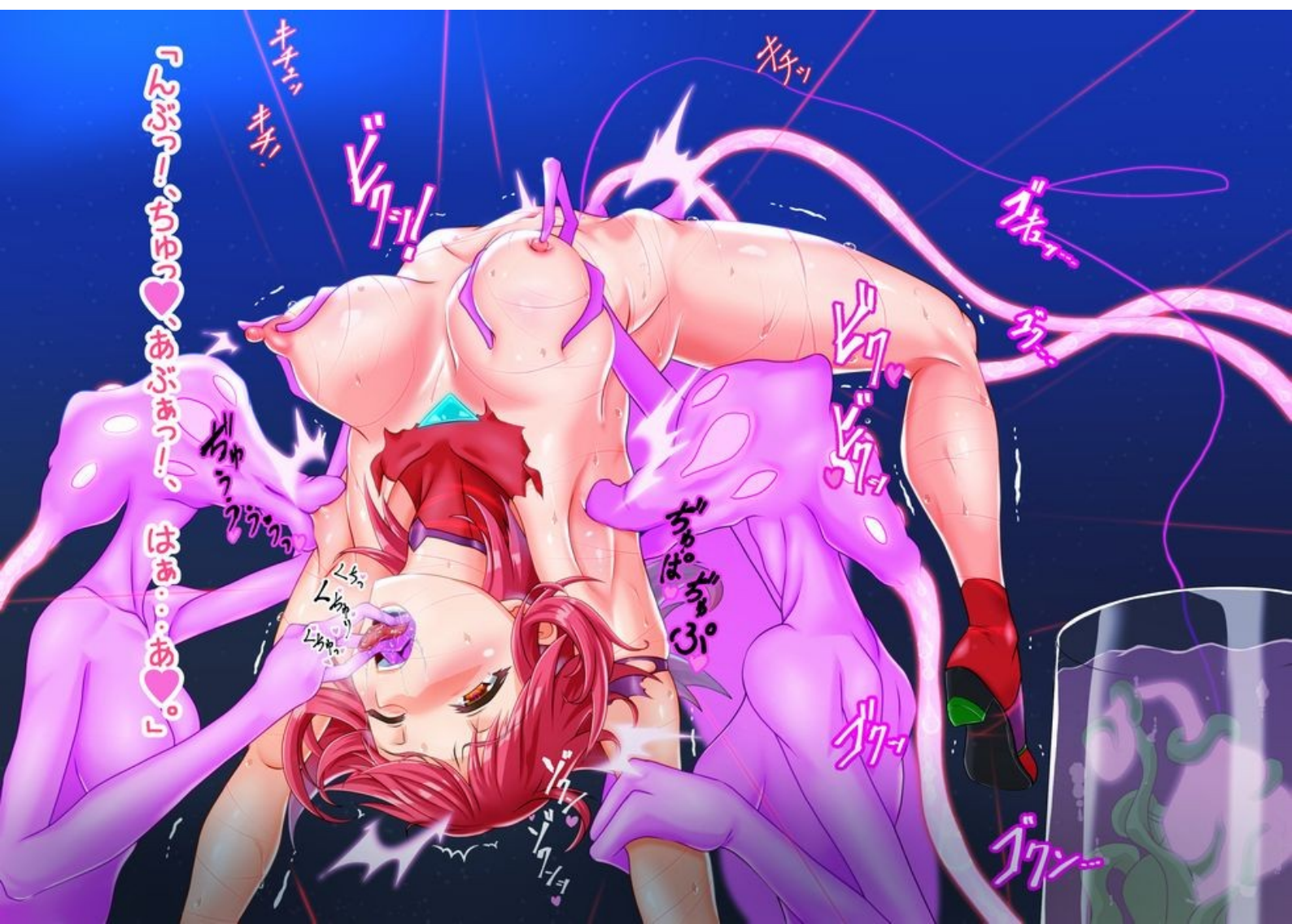


（ちよつと勿体ない気もするけど、コレを使うか。）

カチャ…キリリ…ズ〜ン。

（さつてと、残った死体で宿題をやっちゃおうかな、時間はたっぷりあるしね。）





「んざーっ！ちゅっ♡あぶまっ！はぁ...あ...♡」

キキッ  
キキッ

グワッ!

キキッ

グワッ  
グワッ

あやう...  
グワッ

ちゅっ  
ちゅっ  
グワッ

グワッ  
グワッ

グワッ

グワッ

ちゅっ  
ちゅっ

グワッ  
グワッ





「んっっっー♡♡♡…ふ…うあ…あ…」

「う…あ…  
…エネルギーの吸われ方が…激しく…」

アイシヤの秘所を貫くエモニーの  
後頭部に生えた棒だが  
先程までの様なパールバンカーの様な  
動きからアイシヤの子宮口を短いストロークで  
小突く動きへと変わった  
ネチネチとポルチオを快感を誘発する棒で  
ノックされる事でお腹から全身に広がる甘露は  
吊り下げられたアイシヤの抵抗力を  
内側から蕩け溶かしていく

直後、アイシヤの体から  
彼女の赤いエネルギー光を放たれるが、  
瞬く間に3体のエモニーがその光を吸い出すと、  
輝きが弱くなる。

キキッ  
キキッ

ヴワッ!

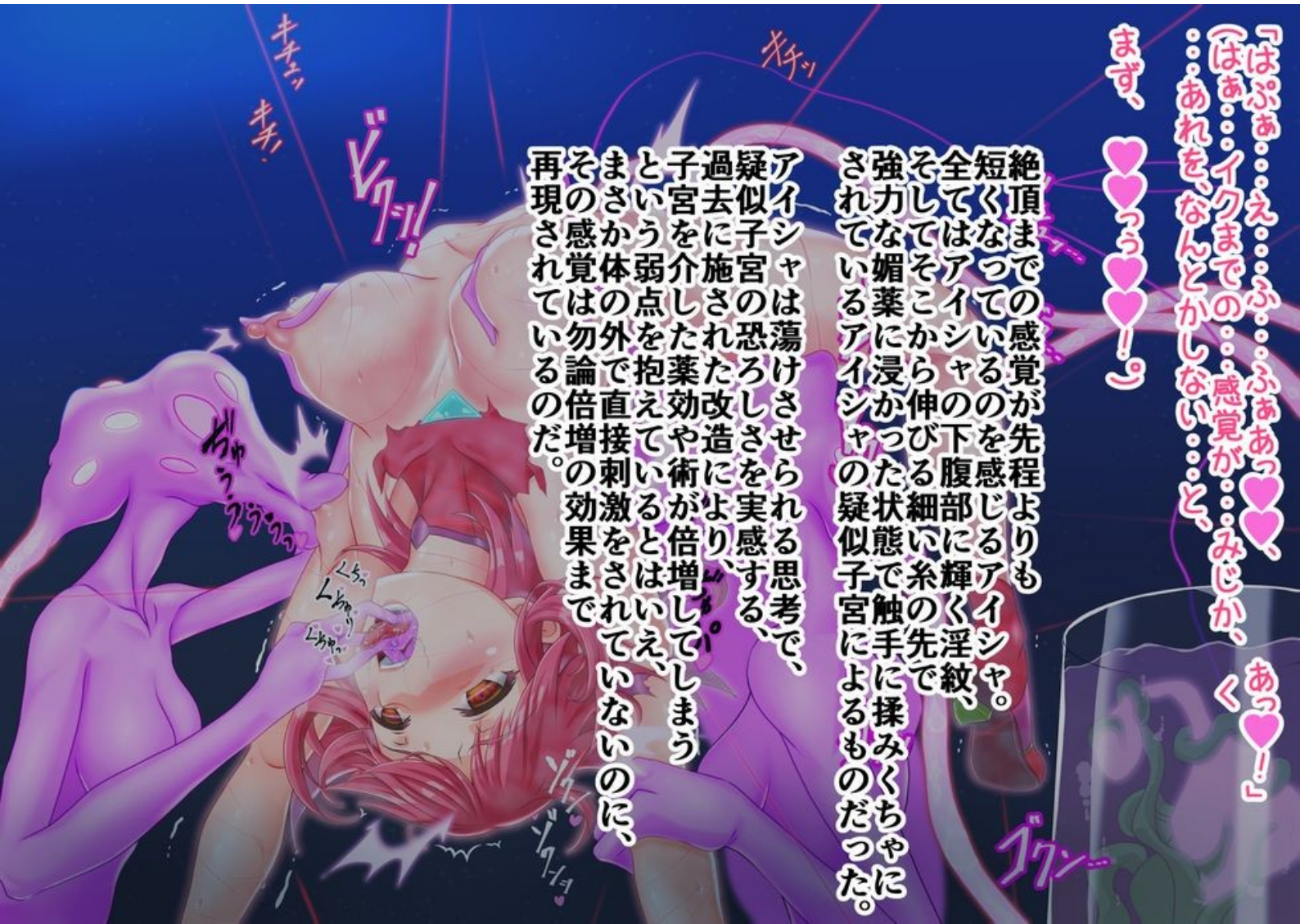
キキッ

あやう…

んっ  
んっ  
んっ

イク





「はぶあ…え…ふ…ふあ♡♡♡  
 (はあ…イクまでの…感覚が…みじか、  
 …あれを、なんとかかしない…と、  
 まず、♡♡♡♡♡  
 あっ♡!」

絶頂までの感覚が先程よりも短くなつて、アイシヤの輝く淫紋、全てはアイシヤの下腹部に輝く淫紋、そしてそこから伸びる細い糸の先で強力な媚薬に浸かつた状態で触手に揉みくちやにされて、アイシヤの疑似子宮によるものだった。

アイシヤは蕩けさせられる思考で、疑似子宮の恐ろしさを実感する。過去に施された改造により、子宮を介した薬効や術が倍増してしまうという弱点を抱えているとはいえないのに、まさか体の外で直接刺激をされていなのに、その感覚は勿論倍増の効果まで再現されているのだ。

キキッ  
 キキッ

キキッ

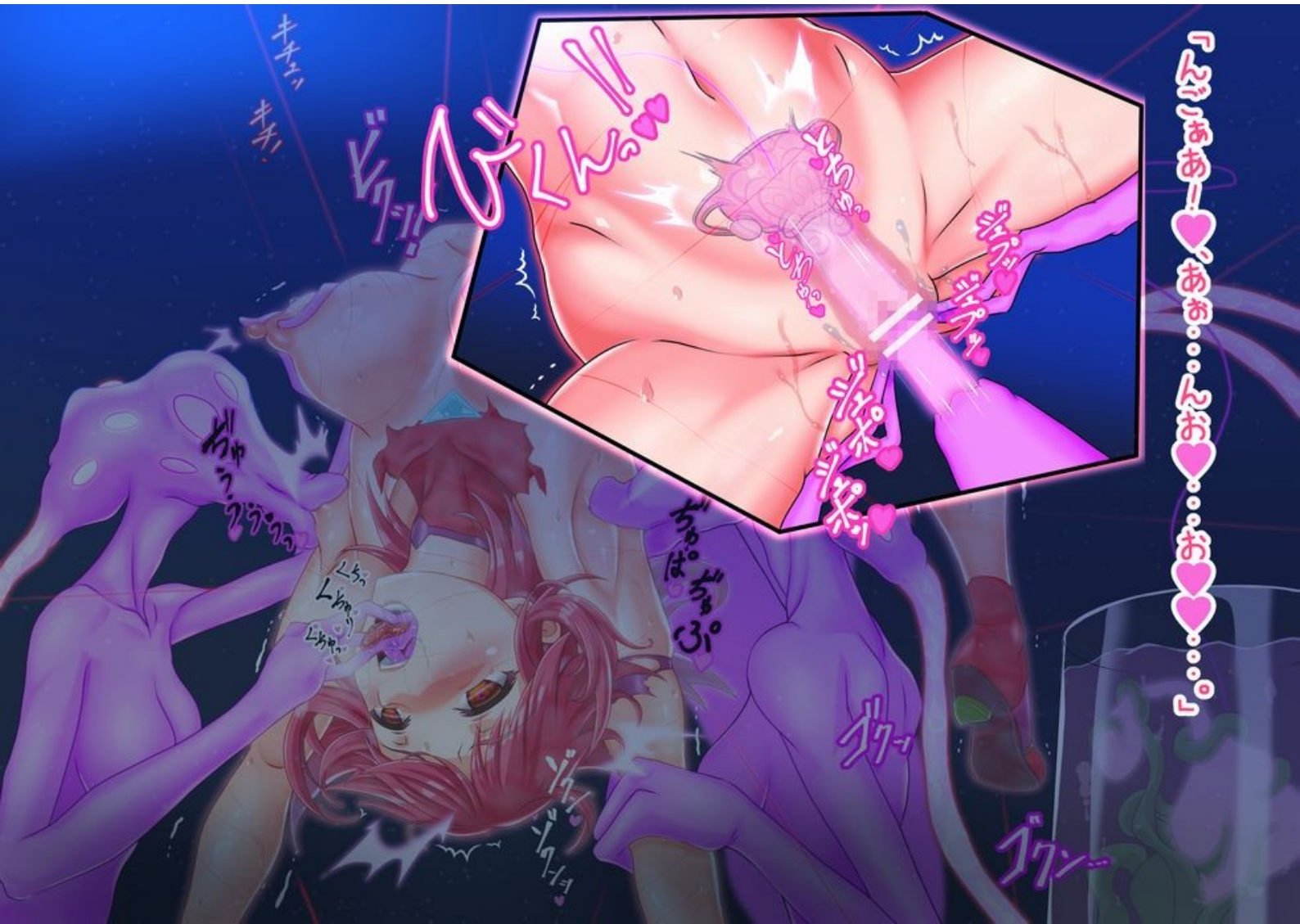
グワッ!

あっ♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

イク



キキキ  
キキ

ズンズン



「んんあー♡あお…んお…お♡…お♡…」

あやう

んん

ちんちん

ズン

ズン

「ほう、ほう、これは、こっちはああ……。」

エモニーがアイシヤから収奪したエネルギーが収められた肉塊状の器具から取り出したエネルギーを針金のような指で弄んでいたキバリスの口から感嘆の声が漏れる。

「流石は高クラスのマーゴハンター、凡百のマーゴハンターのエネルギーとは

質と純度が桁違いだ、これは生まれ持つての物なの？ それとも磨けば輝く物なのかな？、ん、すばらしい！」

「んふおお！……ああ……んれ……んう……あああつ……」

「これは是非とももつと欲しい！、お前たち、しつかりそのマーゴハンターを、気持ちよくさせてエネルギーを回収しろ！、時間は有限だぞ！」

キバリスの号令でエモニーの動きが先程までより激しいものになる。腋へのしゃぶりつき、乳首を弾く指の速度、口内と舌を揉み込む指、下半身のエモニーのピストンとクリトリスへの刺激。

激しくなる責めに思考に更にピンクの雷がかかるが、アイシヤの目にはそれに抗いまだ勝負を諦めていない輝きがあった。

「んふあー♡♡♡あええ、へはあっ！  
…はえ♡♡♡へ♡♡♡」

「このまま、耐えればっ…勝機はある…んくっ♡♡♡」

今回の任務、アイシヤは事前情報から  
相手が上級マーゴではないかと予想していた、  
しかも何故か非常に危険な状況になりそうな予感  
が止まらなかったのだ。

全ては彼女の経験からくる勘によるものだが、  
単身での任務が多い高クラスマーゴハンターは  
そういった状況に置いての采配について  
可能な範囲であれば大抵の要望が通る。

なのでアイシヤは自分が潜入した後  
2時間経つても出てこない、もしくは連絡が  
無い場合は相応のクラスのマーゴハンターを  
リダイレクトした別部隊が直ぐに突入するように  
して欲しいと手配していたのだ。



「へっ……くああっ♡♡♡!、  
「おおあ♡♡♡んおあ♡♡♡お♡♡♡  
「あ♡♡♡……また、ちから……吸われる。  
「まだ……か……」

アイシヤの要請は突然の物だったので  
すぐには他の「マゴハン」が  
見つかからないかと思われたが、  
幸運にもカルミアの都合が合った。  
ただ流石に現場にはなかつたので、  
今すぐ来れるわけではなかつたので、  
カルミアが到着し状況を分析するまでの  
時間を考え、リミットを2時間としたのだった。

アイシヤがキバリスに捕らわれてから  
そろそろ2時間、ちらりと見えた時計で  
それは確認済みだが、  
まだカルミア達はやってこない。

マゴのトリックでは常に予想外の事態が起きる、  
おそろしく突入に手間取っているのだから、  
だが部隊を頼れる相棒カルミアだ、  
アイシヤの頼れる相棒カルミアだ、  
多少の罫の問題にならないだろうし、  
必ず自分の元でこの「マゴ」を倒せばいい。  
その後2人でこの「マゴ」を倒せばいい。  
この「マゴ」の能力は危険だ、  
レギオンクウシは所屬でなくともここで  
必ず仕留めなければならぬ。

だから今は出来るだけ  
エネルギを奪わないように、  
かつ回復ともう二戦交える余力を残す事、  
それが今のアイシヤに出来る事だった。



「んひいあつ♡……あへ♡……んあ♡……お♡……」  
「あ……れ……？……なんれ……？？」

——おかしい——

味方の突入が遅すぎる、最初はもしかしたら迷宮等の罠で別の空間に移動させられたのかと思つたがアイシヤが侵入した時にそれはず調べたがその様な罠は存在しなかつた。

逆さまに宙づりにされているが、マーゴハシターの身体能力ならば頭は血が上る等という事も無い。ではこれまでの快感刺激に時間の感覚がおかしくなつたかというところも違う。

幾度も絶頂を迎えているが意識は保てており、それでも与えられた刺激の量を考えても確実にあれから何時間も経過している、配が全く感じられないのだ。



「君のエネルギーが魅力的だね、  
とっておきを使う事にしたんだ。」

そう言ったキバリスは  
不思議な時計のような物を取り出す。

「これはね結界を張ってその中の時間を  
操れるっていう秘宝だね。  
今この部屋の中の時間は  
外と違う時間が流れてるんだよ。」

突拍子もない話過ぎて変な声が  
漏れてしまうアイシヤ。

「そうだよね、突然そんな話されてもね、  
でも実感してるんじゃない？  
お仲間が全然到着してないでしょ？」

「驚く事もないでしょ、  
流石にボクだつて侵入者には気付くよ、  
一応罠を張つただけど、殆ど役に立たないよ、  
凄いね、君の仲間。」

「後15分もすればこの  
部屋に辿り着くつて感じだつたんでね、この  
『玉座の欠片』  
を使う事にしたんだ。」

「正直僕は多数相手の戦闘は無理なんだ、だから侵入に気付いた時に逃げるつもりだったんだけど、君のエネルギーがどうしても欲しくて、ここが使い所かなって。」

ただこれって使える量が決まってるね、やっぱ使い過ぎは出来ないから、今回は外の1分がこの部屋では1日になるようにしたんだ。」

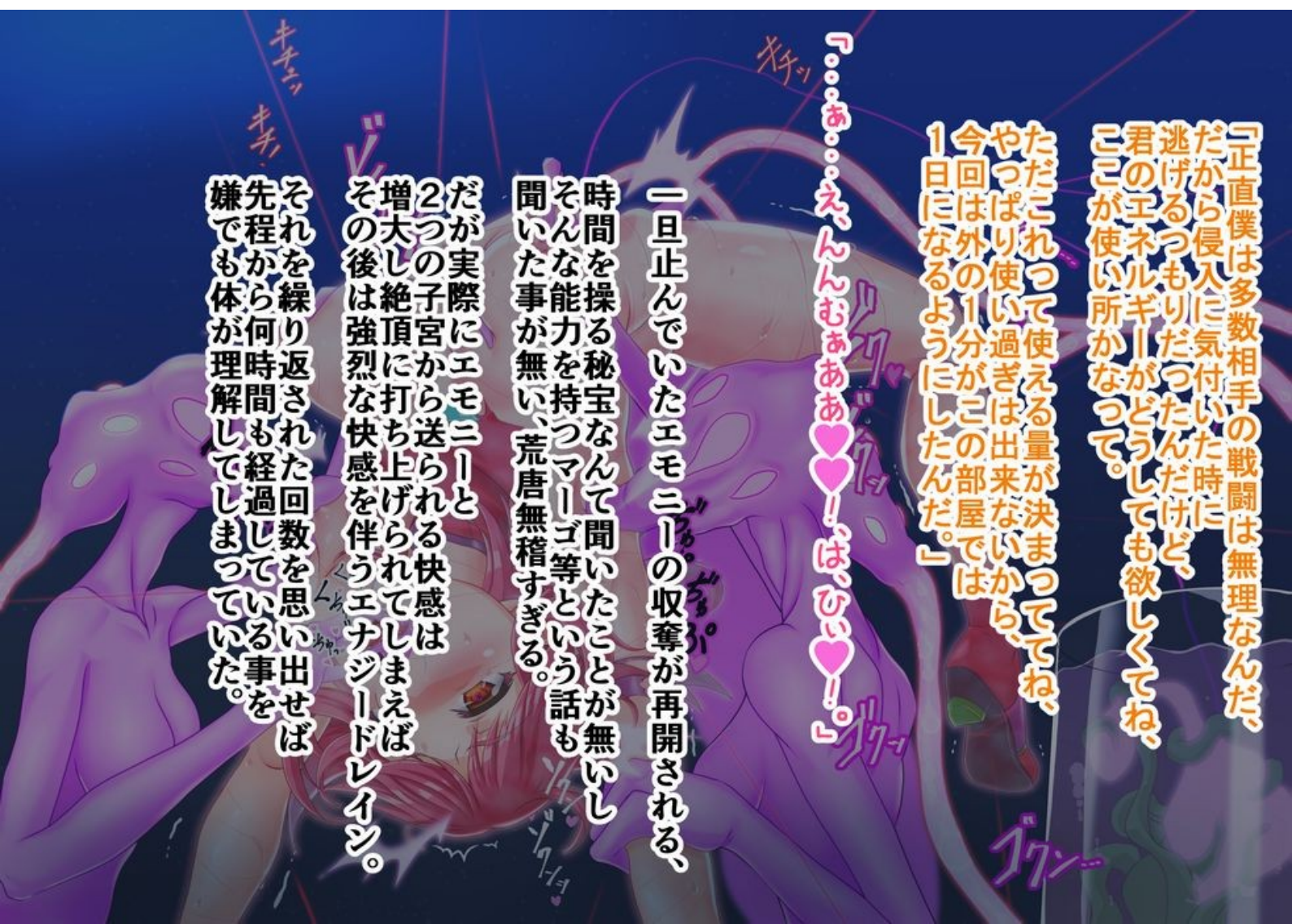
「……あ……えんもああ♡♡は、ひい♡♡」

一旦止んでいたエモニの収奪が再開される、

時間を操る秘宝なんて聞いたことが無いしそんな能力を持つマーゴ等という話も聞いた事が無い、荒唐無稽すぎる。

だが実際にエモニと2つの子宮から送られる快感は増大し絶頂に打ち上げられてしまえばその後は強烈な快感を伴うエナジードレイン。

それを繰り返された回数を思い出せば先程から何時間も経過している事を嫌でも体が理解してしまっていた。





「もう十分収穫出来たんで僕は帰らしてもらおうね、  
これだけの量の高純度エネルギーがあれば  
暫くは研究に没頭できるだろうし  
もつと強力な糸が出来そうだよ、  
ありがと〜」

赤く輝くエネルギーが満ちたタンクに  
お前ら運べと  
命じると、そこから4本の足が生え  
すつくと起き上がる。  
そしてタンクは  
アイシヤが最初に入ってきた扉とは  
反対にある扉へと歩き出す。

「ああそうだ、  
お礼に君にはこれをプレゼントするよ、  
おい動け。」

エモニーがアイシヤから  
エネルギーを奪っている間、  
キバリスは運び込んでいた死体等を使い  
何やら作業していたのだが、  
作り上げた肉塊に命令を下すと、  
肉塊がのっそりと動き出す。

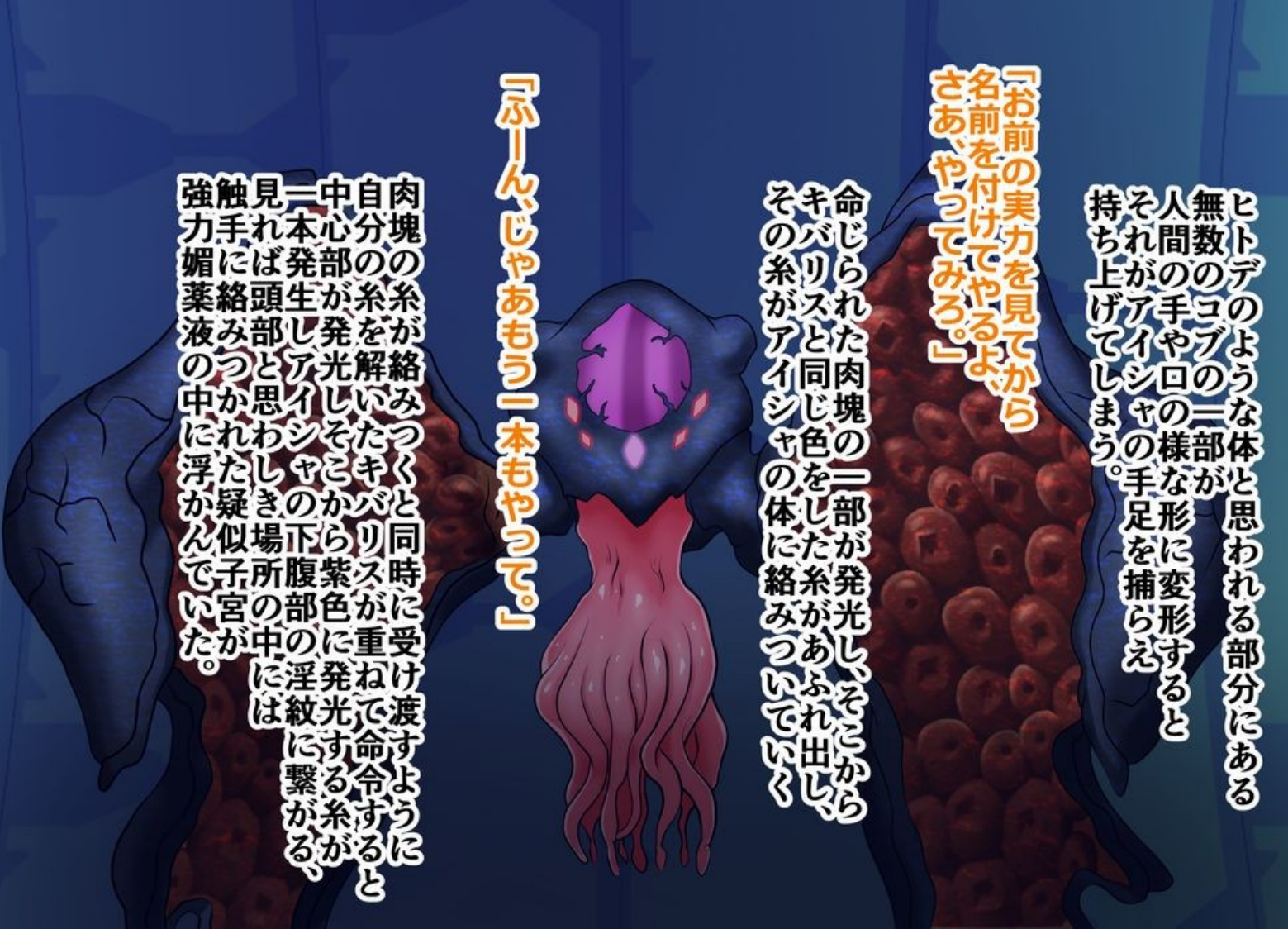
ヒトデのような体と思われる部分にある  
無数のコブの二部が  
人間の手の口の様な形に変形すると  
それがアイシヤの手足を捕らえ  
持ち上げてしまう。

「お前の実力を見てから  
名前を付けてやるよ、  
さあ、やってみる。」

命じられた肉塊の二部が発光し、そこから  
キバリスと同じ色をした糸があふれ出し、  
その糸がアイシヤの体に絡みついていく

「ふーん、じゃあもう一本もやって。」

肉塊の糸が絡みつくと同時に受け渡すように  
自分の糸を解いたキバリスが重ねて命令すると  
中心が発光し、そこから紫色に発光する糸が  
一本生じ、アイシヤの下部の淫紋に繋がる、  
見れば頭部と思わしき場所の中には  
触手に絡みつかれた疑い宮が  
強力媚薬液の中に浮かんでいた。



体中を蹂躪されガクガクと揺すられるままに  
犯されるアイシヤを見て  
子供に乱暴に扱われる人形みたいだな。  
とキバリスはなんとなく思う。

「とりあえず死んだ脳の  
まだ使える部分だけ繋げてみたけど、  
いああ人間つて本当性欲の生物だよ、  
死んでもその部分は使えりとか  
繋げただけでこれだもの、  
淫紋も疑似子宮もそのままにしておいて正解かな。」

這い回る触手の動きが活発になると  
先端から白濁とした粘液を放出した。

「集まると動物以下になるのも  
ほんと、人間だよ、ね。  
いくら女王の頼みでも  
これを僕の作品とは言いたくないから  
君、こいつ好きにしていよう。」

欲望を吐き出しアイシヤの体を  
白濁にデコレーションしてなお  
活発に触手を女体に擦り付ける生物の様を見て  
キバリスはこれは完全に失敗だど決定する。  
そうすると出来上がつた瞬間の楽しい気持ち  
みるみる冷めていつてしまふ。

キバリスの糸の能力には、生物と生物を繋ぐ能力がある、とはいえそれは強力な力では無く、人間とマールゴを繋ぐ事等当然出来なかつた。

にもかかわらずある時レギオンクラウンから人間とマールゴを組み合わせた生物を作つて欲しいという依頼があつた、勿論最初は断つたし、レギオンクラウンとは金だけの関係だつたのでそこまでする気は無かつた。

しかし後日その依頼をレギオンクラウンの女王に直々に頼まれるという事態が起こる。

その時の事は今でも一部曖昧なのだが、気が付くとキバリスは初めて会つた女王に二目惚れしてしまつたのだ。女王もそれを受け入れた。今では玉座の欠片等を貰えるようになったし、レアアイテム等は不思議と能力が女王と会つたりするのだ。強力になつたりするのだ。

今では自分が女王に最も寵愛を受けていると自負できるし、だからこそ女王の期待に答える為にもこの依頼を果たさなければならぬと思つていた。

だが、使命感とは裏腹に  
失敗作を生み出した時の  
ガツカリ感というのには本当に辛いし、  
拠点を失うのも地味に堪える。

せめてもの救いは今回は  
予想外に高純度のエネルギーが大量に  
手に入った事くらいだろう。

「そいつにエナジードレイン能力は無いから  
回復したらもしかしたら脱出できるかも  
しれないね、まあ僕の糸を敗ればけどね、  
後1日……じゃないや1分で  
結界も消えるから、ここからは精々頑張つて。  
今回は君のお陰で助かったよ、  
完全に失敗なんて嫌だからね。  
また会えたらもつと凄い糸で  
色々してあげるからね。」

唯一の成果をもたらしてくれた  
マーゴハンターへの  
感謝の言葉を最後にキバリスは  
エモニーを連れ立ち  
先程のタンクが出ていった  
ドアを開け部屋を出ていった。



その後結界の中での30秒で  
エネルギ川を半分以上回復した  
アインシュタインだったが、  
系の能力から脱する事は叶わず、  
結界の消滅後、カルミア達に救助される、

その際生物はカルミアによつて倒されたが  
生命力が凄まじく動けない状態になつても  
体の機能が生きていたもので  
中にあつた糸等がそのまま残つており、  
現在アダムンテイウス・リベラテイオ  
の化学班によつて解析が進んでいる。

だが肝心の系にはマリーゴ本人以外の能力が  
付与されておらずそれが弊害になつて解析が  
難航しているという話である――。